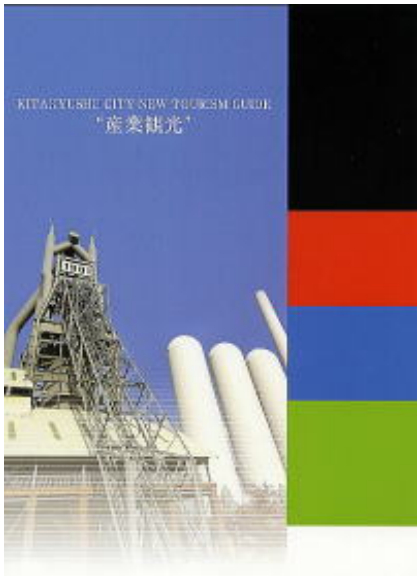
北九州テレビInternet TV NEWS
http://www.kitakyu.tv DIGEST
お問合せ：info@kitakyu.tv
©北九州テレビ 2006

２００６．７．11第　　27号



A5 版、四色カラー、5,000 部発行

北九州市　産業観光振興のため

―「産業観光ガイドブック」発刊―

河内貯水池、九州鉄道記念館、
南河内橋(通称：めがね橋)、門司港駅など産業歴史遺産を紹介！

北九州市では、このたび「モノづくりの街」を産業観光の核としてとらえ、工場見学だけではなく産業遺産をも含めたガイドブック「産業観光ガイドブック」を地元の事業所などの協力により発行した。

今回「産業観光ガイドブック」の発行にあたって北九州市は、「観光振興を図る方策として、かつて四大工業都市の一つとして国有数の工業都市であった北九州の特性から、これまで重工業から家庭用品まで様々な工場を見学することによって、観光振興を図る方策を実施してきた。今後は工場見学だけではなく明治、大正、昭和、平成と石炭、鉄鋼、自動車、環境産業関係へと受け継がれてきた産業の歴史遺産を総合的に紹介した“ガイドブック”を作成、産業観光の振興に活用したい」としている。

日本初の立体交差、二重構造の JR 折尾駅

JR 門司港駅（国指定重要文化財）

同ガイドブックでは、北九州の産業の歴史を解りやすくつぎのように紹介している。

北九州市の歴史において門司港地区は、明治の頃には石炭の中継貿易や大陸貿易の基地として栄え、門司港を起点とした門司港・玉名間の九州鉄道が明治 24 年に開通した。同年、九州鉄道の本社ビルも門司港において竣工した。その門司港では、当時中国大陸との定期航路が開設されるなど、大陸に向けての玄関であったため中央大手資本である三井物産門司支店、旧藤本ビルブローカー銀行門司支店、旧横浜銀行正金銀行門司支店が進出し今もその建物が現存している。

南河内橋（通称：めがね橋）：径間 66m、幅員 4.1m
日本で唯一残るレンティキュラートラス二連の橋
(レンティキュラートラス：凸レンズ状の構造)

八幡東区においては、明治３４年に操業を開始した「官営八幡製鐵所」時代の「八幡製鐵所東田第一高炉」が今では市指定史跡として見学できるようになっている。

また、大正 15 年に竣工し、**現在日本ではここでしか見ることができない**レンティキュラートラス二連からなる世界的にも珍しい構造の「南河内橋（通称：めがね橋）」、ほか大正 8 年から 8 年の歳月と延べ 90 万人の人力を使って製鉄用用水確保のため建設し昭和 2 年 1 月に竣工した「河内貯水池」があるほか、平成２年には世界で初めて宇宙をテーマにした大規模テーマパーク「スペースワールド」が開園し、

石炭景気に沸いた若松と大正建築の
特徴を残す、旧古河鉱業若松ビル

修学旅行生も増加している。

若松地区は、国内最大級の規模であった筑豊炭田の貯炭場があったため、明治 31 年には、国内では初となる石炭用ホイストクレーンが設置された。

その後、石炭景気に沸き若松の象徴でもあった、大正 8 年竣工の旧古河鉱業ビルは、現在でも市民に親しまれている。昭和においては、30 年代に産業公害をもたらし、市民・行政・産業が一体となって公害を克服。その公害を克服した経験・技術を活かし、平成 9 年には国から認証を受け「北九州エコタウン事業」に着手、同区内の「北九州エコタウン地区」において、ペットボトル、廃自動車、廃家電、使用済み蛍光管などの 3R（リサイクル・リユース・リデュース）をすることにより資源循環の究極的目標であるゼロ・エミッションを目指した「複合中核施設」を建設し、他の地区の学生、自治体関係者や他海外からの見学・視察も多く訪れている。

それゆえ、北九州市ではこれまで以上に産業観光の充実を図るために、下記、産業事業所などに協力を願い、上記施設ほか、スラブがローラーを通過する毎に引き延ばされる様子が見学できる「新日本製鐵㈱八幡製鐵所の熱延工場」の紹介、高炉からの一貫製造プロセスで製造される高機能特殊鋼の専業メーカーである「㈱住友金属小倉」、40 品目 1,600 種類もの化学製品を生み出す総合化学工場「三菱化学㈱黒崎事業所」、ロボットがロボットを造るモートマンセンターの「㈱安川電機」、世界中の発電プラントに製品を納める鋳鍛鋼業界有数の企業「日本鋳鍛鋼㈱」、精密金型技術で世界へはばたく「㈱三井ハイテック」、水栓金具の部品製造工程から製品組立工程まで見学できる「東陶機器㈱小倉第二工場」、自動車産業では「日産自動車㈱九州工場」、「トヨタ自動車九州㈱」、「㈱デンソー北九州製作所」などを紹介。さらに報道関係においては、平成 16 年 11 月には、九州地区の新聞印刷業界初の環境 ISO14001 取得認証工場となり、産業用ロボットなど駆使し新聞製作を行っているところを見学できる「朝日新聞グループの㈱朝日北九州プリンテック」、コンピューターシステムで紙面編集を行っている現場を見学でき唯一北九州に本社機能を有する「毎日新聞西部本社」、高さ 10m、時速 35km の紙送りを行うタワー型高速輪転機が稼動している工場を見学できる「読売新聞北九州工場」、のほかニューススタジオ内でアナウンサーの体験もできる「NHK 北九州放送局」の紹介など産業観光協力事業所 37 ヶ所、および主な産業遺産 26 ヶ所（別途：25 ヶ所）を掲載している。

また、平成 18 年度中には、技術革新をテーマにした「（仮称）産業技術保存継承センター」が八幡東田に完成予定で、北九州市がこれまで蓄積してきた技術や技能を見学できることとなる。

旧ごんぞう小屋
ごんぞう：北九州では、沖の本船で石炭荷役をする沖仲仕を“ごんぞう”と呼んだ(上小屋資料より)

なお、11 月には「第 6 回全国産業観光フォーラム」が北九州市で開催されることになっているため、“産業観光ガイドブック”の発行は同市にとって北九州の産業観光の案内には絶好の機会であるとしている。

石工の伝承技である切石積･野面積･割石積･自然石積
などその造形美に目を見張る河内貯水池
(新日本製鐵㈱八幡製鐵所)

炭滓線(たんさいせん):高炉から排出されたスラグ(副産物)を八幡から戸畑へ運んでいた

炭滓線宮田山トンネル
(現新日本製鐵鉄くろがね線宮田山トンネル)

旧門司税関(大正元年竣工)
昭和初期まで税関庁舎として使用していた